

頭部への穴開けサポート 脳手術ロボット導入

徳大病院 中四国で初

徳島大学病院（徳島市）は、脳の手術を支援するロボット「ステルスオートガイド」を中四国の病院で初めて導入した。事前に入力した情報を基に、手術のために穴を開ける必要がある頭部の位置を正確に割り出すことができ、手術時間の短縮につながるという。てんかんを引き起こしている脳の部位を特定する検査などに利用されている。

ロボットは、脳内の目標地点を開ける場所や安全に針を差しを事前に設定すると、頭部に穴 込める角度を示してくれる。医



新しく導入した手術支援ロボットの操作を確認する高木教授（左）と多田恵暉特

任講師 徳島市の徳島大学病院

時間短縮 患者の負担軽減

師はロボットの支援を受けながら頭蓋骨に直径約3ミリの小さな穴を開けて針を刺し、脳内に電極を差し込んだり、細胞の一部を採取したりすることができ

る。従来、画像検査でてんかんを引き起こす部位を特定できなかった場合には、主に開頭して脳の表面に電極を取り付けて検査をしていた。しかし、この方法では脳の表面だけの検査にとどまり、深部の異常を調べられない上、傷が大きいため患者の心身の負担も大きいという。

ロボットの導入により、短時間で脳の深部の複数箇所へ電極を安全に差し込むことが可能となった。差し込む際にできる傷は1力所あたり1センチほどと比較的小さく、患者の負担は軽減される。

2月に導入され、既にてんかんの検査で2件、脳腫瘍の生検で3件利用されている。徳島大学脳神経外科の高木康志教授は「ロボットの導入により、脳疾患の検査を今までよりも患者の負担が少なく安全に行えるようになった」と話す。

（佐藤聡美）